



Data

監督：ジャウマ・コレット＝セラ
 原案：パイロン・ウィリンガー／ラ
 イアン・エンゲル
 製作：アンドリュー・ローナ／アレ
 ックス・ハインマン
 出演：リーアム・ニーソン／ヴェ
 ラ・ファーミガ／パトリッ
 ク・ウィルソン／サム・ニー
 ル／エリザベス・マクガヴァ
 ン／ジョナサン・バンクス／
 フローレンス・ピュー

👁️👁️ みどころ

「列車モノ」は面白い。それは『オリエント急行殺人事件』（17年）や『スノーピアサー』（13年）等で実証されているが、本作の原題である「コンピューター」（＝通勤電車）で仕掛けられてきた「ある任務」とは？

元警察官ながら、解雇通告を受けた平凡な中年（老年？）男は10万ドルの報酬につられて「トレイン・ミッション」を引き受けたが、その制限時間は始点から終点までの105分間。

途中で「しまった！」と思っても、もう遅い。とんでもない“巨悪”が起こした事件に巻き込まれる中、元警察官の能力を駆使して主人公はいかなる活路を・・・？ニューヨークの通勤電車を舞台にした、ヒッチコック流の「列車モノ」の面白さをタップリと楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■通勤電車を舞台に「列車モノ」の新たな傑作が！■□■

「列車モノ」は面白い。それは、本作のパンフレットにある、高橋諭治氏（映画ライター）の「列車を舞台にしたミステリー、スリラー、アクションの愉しみ」の中で、①列車ミステリー②列車スリラー③列車アクションの3種類に分けて分析されている。私は全面的にこの解説に賛成だ。近時それを実証したのが、ポン・ジュノ監督の韓国映画『スノーピアサー』（13年）（『シネマ32』234頁）だったし、古くは、あまり知られていないがフォン・シャオガン監督の中国映画『イノセントワールドー天下無賊一』（04年）（『シネマ17』294頁参照）だった。

しかして、ジャウマ・コレット＝セラ監督が『フライト・ゲーム』（14年）（『シネマ33』

134頁)等に続いて、リアム・ニューソンと4度目のタッグを組んだ「列車モノ」の新たな傑作である本作の舞台は、ニューヨーク市街と郊外を南北に結ぶ通勤電車メトロノース鉄道のハドソン線。『スノーピアサー』は永久機関のエンジンを積んで雪原を突っ走る近未来の列車が舞台だったし、『イノセントワールドー天下無賊』はチベット鉄道が舞台だった。また、上記で高橋氏が解説している映画では、『オリエント急行』はもちろん『バルカン超特急』も『大陸横断超特急』も珍しい列車ばかりだった。それに対して、ニューヨークのハドソン線は比較的教育・生活水準が高いエリアを走るため、平日の通勤客はホワイトカラーの社員がほとんど。また、始点から終点までの所要時間は約2時間弱(105分)らしい。

本作の邦題は『トレイン・ミッション』だが、原題は『THE COMMUTER』。これは「通勤する人」のことだ。そして本作の主人公は10年間自宅と会社の往復にこのハドソン線を利用してきた男マイケル・マコーリー(リアム・ニューソン)だ。そんな主人公を真正面に据えて、はじめてニューヨークの「通勤電車」を舞台にした新たな「列車モノ」の傑作が誕生!

■□■二重人格なればこそ面白い!?!■□■

スパイは人間の欲望や人間性を抑圧(自制)し、ひたすら与えられた任務を忠実に実行するのみ。それが本来の理想像だが、有能なスパイだって欲望はある。したがって、スパイだっていい女は大好きだから、色に溺れたり、ハニートラップに陥るのも仕方なし。それが『007』シリーズにおける、「殺しのライセンス」を持ったスパイ、ジェームズ・ボンドのキャラクターだが、どちらかという人間はこのような二重人格の方が面白い。しかして、本作の主人公マイケルも典型的な二重人格者!?

冒頭に描かれるマイケルは、定時に起き、定時の通勤電車に乗って会社へ行き、定時の通勤電車で自宅に戻るといって、定年まであと5年の中年(老年?)男。生命保険会社の社員として有能かどうかまでは描かれないが、中途採用のようだから、いくら勤続10年といっても、この手の真面目が取り柄だけの男では出世はムリ。そう思っていると案の定、突然の解雇通告のシーンになるから、ああやっぱり……。

マイケルは、その日の夕方に待ち合わせしていた友人で、ニューヨーク市警時代の相棒マーフィー(パトリック・ウィルソン)とビールを飲みながら、突然解雇されたことへの不満をぶちまけるが、私に言わせれば「不当解雇!」を叫んで、ケンカするくらいの心意気でなくっちゃ。ところが、マイケルは電話がかかってきた妻にもその説明が出来ないままだから、アレレ……。さらに、「相棒だった7年間、俺を守ってくれた。恩返しをさせろ」と親切に言ってくれるマーフィーに対しても、「ありがとう」と言うだけで、なんら具体的な展望は見せなかった。日本でもアメリカでも、何の取り柄もない(いや、真面目だけが取り柄の)60歳男の職場の幕切れなんてこんなものだ。

もつとも、それでは映画にならないから、マイケルがその日の帰り、いつもの「コンピューター」（＝通勤電車）に乗り込んだところから本作のストーリーが始まるが、その直前にマイケルの携帯が盗まれるのがミソ。平凡な定年直前の通勤男のスーツの中から携帯を盗むヤツなど普通はいるはずがないが、それは一体なぜ・・・？また、マイケルが空いている席に座ると、向かいの席にいい女（ヴェラ・ファーミガ）が座り、マイケルが読んでいた小説を話題にしたうえ、自分の名前はジョアンナだと親しげに話しかけてきたからアレ・・・。こんなシチュエーションは、この通勤電車に乗って10年間1度もなかったが・・・。

マイケルを演じているリアム・ニーソンは1952年生まれだから、私と3歳しか違わないが、『シンドラーのリスト』（93年）で演技派としての実力を見せた一方、近時は『96時間』シリーズ（08、12、14年）（『シネマ35』132頁）等で素晴らしいアクションを見せている俳優。前述した『フライト・ゲーム』（14年）（『シネマ33』134頁）では、航空保安官という珍しい職業になりきり、高度1万メートルを飛ぶ旅客機内で素晴らしい知恵とアクションの冴えを見せていた。したがって、マイケルには本作冒頭で見せる真面目で小心なサラリーマン親父だけではなく、何らかの別の面（能力）があると思い、その二重人格性を信じていたが、それはストーリーが進んでいくにつれて徐々に見せつけられていくことに・・・。

■□■奇妙な依頼は？10万ドルの報酬なら誰でも・・・■□■

本作のパンフレットには、松崎健夫氏（映画評論家）の「移動する空間を舞台にしたヒッチコック的世界」と題する「REVIEW」があるが、「ヒッチコック的世界」とはナニ？映画好きの人は100人中100人ヒッチコックが大好きだが、その興味の持ち方は100人中100人が違うところが面白い。それだけヒッチコックの映画は複雑で難解、そして伏線の敷き方が面白く、ネタや仕掛けが多いということだ。それは、この「REVIEW」でも解説されているとおりで、はっきり言って本作は1度観ただけですべての設定やネタ、仕掛けを見抜くのは難しい。しかも、始点から終点までは105分間と時間的制約があるうえ、本作のクライマックスには2005年4月25日に発生した「JR福知山線脱線事故」を彷彿とさせる、コンピューターの転覆シーンが登場するので、その緊迫感はずごい。

本作に見る、そもそもの「ヒッチコック流問題提起」は、ジョアンナがマイケルに対して持ちかける奇妙な「依頼」。それは「もし私がちょっとした頼みごとをしたら引き受ける？」という仮定の質問の上に、①ある人物と盗品の入ったカバンを見つけてほしい。②ただし、途中下車や他言は禁止。③ヒントは普段見かけない乗客で、カバンを持っていること。④プリンという偽名を名乗っていること。⑤この電車の終点、コールドスプリングで降りること、等だが、報酬が10万ドルで、手付はトイレの中に隠していると言われれば、あなたならどうする？もちろん、殺人依頼等のはっきり違法なものであれば断るだろ

うが、上記のような内容で、しかも“俺なら実行可能”と考えれば、誰だって引き受けるはずだ。もちろん、そこにはいくつかの質問や確認事項があるはずだが、言いたいことだけ言ったジョアンナが次の駅で決めてしまうのが、またヒッチコック流！ジョアンナは「あなたの性格は次の駅までにわかる」と言い残したが、さて・・・？

このように考えると、ジョアンナのマイケルに対する申し出は、形の上では“依頼”だが、実は強制的な命令・・・？いったんはその依頼を引き受けたものの、①次の駅での停車中に、フードを被った若い女性から妻カレン（エリザベス・マクガヴァン）の結婚指輪を渡され、「あんた、見張られてる」と警告されたこと。②顔見知りの乗客ウォルト（ジョナサン・バンクス）の持っていた新聞に素早く「警察に通報を」と書き、同じくトニー（アンディ・ナイマン）から携帯電話を借りてマーフィーの留守電に「自宅を調べてくれ」とメッセージを残したところ、怒ったジョアンナから電話があり、下車したウォルトが自動車にはねられるところを見せつけられたこと。③さらに、ジョアンナから次は妻か息子の命を奪うとほのめかされたこと、等をみれば、これは明らかな命令だ。

■□■一体何度列車を移動？その中でマイケルの発見は？■□■

「潜水艦モノ」は「密室モノ」の典型だが、潜水艦の乗員はそれぞれの持ち場で任務を持っているので、艦の水平を保つための全員での前後への移動シーンは時々あるものの、基本的に乗員の移動は少ない。それと同じように、座席指定とされている「列車モノ」では基本的に乗客の移動はないから、あえてその中で移動するヤツは概ね“変なヤツ”と相場が決まっている。また、混雑しているため立っている乗客が多い地下鉄等でも、その中をあえて移動するヤツは、概ね“変なヤツ”・・・？

そう考えると、始点から終点までコンピューター内を何度も行ったり来たりするマイケルは“変なヤツ”だが、それはマイケルに与えられた任務を考えればやむを得ない。そこで発揮されるのが、刑事時代に培われた観察眼だ。プリン捜しを始めたマイケルは、それらしき乗客に話しかけては相手の素性を確かめ、車掌に彼らのカバンを検査させることによってプリン捜しを続けたが、そこで不審な動きを見せたのは、首にタトゥーのある男。マイケルは彼がプリンだと確信し、格闘の末にジョアンナの指示通り彼のカバンにGPS発信機を取り付けたが、そこでマーフィーから電話が入り、2日前の市職員殺害事件の目撃者がプリンだと判明。そのため、自分が贈収賄に絡んだ陰謀に巻き込まれ、目撃者の口封じに利用されていると知ったマイケルは慌ててタトゥーの男を捜したが、彼は既に何者かに殺害されていた。そのため、マイケルのプリン捜しは再び振り出しに戻ることに。

こんな手作業(?)の連続で、コンピューターが終点に着くまでにマイケルはプリンを捜し出すことができるのか？そう心配になってしまうし、乗客たちもマイケルの強引な捜査に反感し始めたのは当然だ。前述したように、ここまでのスリリングなストーリー展開はメチャ面白いが、同時に結構難しい。マイケルの観察眼はさすがだと思う反面、ちょっとで

き過ぎの感もある。しかし、そんな中、マイケルはついにプリンらしき人物を6人にまで絞り込んだからすごい。その6人とは、①ギターの名・オリヴァー、②読書家の学生・ソフィア、③看護師・エヴァ、④最後尾の車両の名・ジャクソン、⑤女子大生・グウェン、⑥株式仲買人・ヴィンスだが、さて、それ以上のプリンの特定は？

■□■巨悪の根源はどこに？■□■

「モリカケ問題」は朝日新聞が必死に迫り続けたおかげで、かなり問題点が絞られてきた。それによって、安倍晋三総理の下での一強多弱体制が続き、3度目の総裁選も勝利確実と思われていたが、そんな政治状況にも、今大きな変化が生まれている。しかし、その中で明らかになった“巨悪”とは？松本清張の小説や、去る3月17日に大阪アジア映画祭で観た台湾映画『血観音』（17年）ならそんなテーマになるはずだが、「モリカケ問題」はいくら迫しても、せいぜい官僚の付度のあり方や文書の改ざん問題が暴かれるだけで、“巨悪”に迫るテーマではない。私はそう思っているが、本作では、ニューヨーク市の都市計画課の職員2人の自殺（？）に絡む、ニューヨーク市やニューヨーク市警察の“巨悪”が暴露されそうだから、それに注目！

本作冒頭に見る、その悪人予想はマイケルもマーフィーも毛嫌いしている、元上司のホーソーン警部（サム・ニール）だが、マイケルが引き受けたプリン捜しの仕事の途中でウォルトは殺されてしまうし、マイケルの妻・カレンたちが人質に取られていることも間違いない。また、プリンが目撃したと言う2日前の市職員殺害事件が贈収賄に絡んでいることは確実。さらに、プリンはこの男だとマイケルが確信したタトゥーの男は殺されてしまったうえ、この男はFBIの捜査官だったそうだから、この贈収賄事件の巨悪性は奥が深そうだ。しかし、その根源は一体どこに？

■□■人質解放交渉人は？巨悪の手先は？■□■

マイケルたちが乗ったコンピューターが転覆事故（？）を起こす中、マイケルの機転と決断、そしてその肉体的能力のおかげで最後尾車両に移った乗客たちは命拾いをしたが、その電車は今ニューヨーク市警に囲まれ、マイケルの手から「人質」を解放するべく、SWATの出動も目前に迫っていた。そんな中、マイケルとの“人質交渉人”として現れたのはマイケルの旧友マーフィーだが、さて、その交渉の行方は？

ここ数日トランプ大統領は、化学兵器の使用疑惑が急浮上したシリアへの攻撃を巡って、仏・英との最後の協議を詰めながら、シリアやロシアとのギリギリの最終交渉を行ってきた。そして、シリアのアサド大統領は、一方で化学兵器禁止機関（OPCW、本部オランダ・ハーグ）による現地調査に対して積極的な受け入れ姿勢を示しながら、他方では「（米国などによる）攻撃は何であれ、さらなる不安定化を引き起こすだけだ」と警告していた。そんな中、逆にトランプ大統領はシリア時間の4月14日未明、首都ダマスカス近郊など

の化学兵器関連施設3ヶ所へミサイル105発を発射するという軍事攻撃に踏み切ったが、今後のそれに対するシリアの反撃、報復は・・・？

本作にみるマイケルVSマーフィー間の交渉も、それと同じくまさにギリギリのものが、さあ、その展開は？巨悪の手先は一体ダレ？そんな、伏線いっぱい、ネタ仕込みタツプリの本作のクライマックスは、あなた自身の目でしっかりと。

■□■プリンは誰だ？『スパルタカス』(60年)を彷彿！■□■

ハリウッド俳優のマイケル・ダグラスがカーク・ダグラスの息子であることは、名前を聞くまでもなく、あごの形を見ればすぐわかる。そのマイケル・ダグラスの代表作が第60回アカデミー賞主演男優賞を受賞した『ウォール街』(87年)なら、カーク・ダグラスの代表作は『スパルタカス』(60年)。私は中学時代にそれを観たが、その後テレビ放映されるたびにいつも観ている。そこで毎回感動させられるのは、ローマ軍に敗れた奴隷軍のリーダーである、「スパルタカス是谁だ？」というシークエンス。名乗り出れば死罪になるのは当然であるにもかかわらず、そこでは次々と「I am Supartacus」と虚偽の申告が相次ぐから、中学生の時からその感動的シーンが目に焼き付いているわけだ。

しかして、本作におけるマイケルの「トレイン・ミッション」は、始点から終点までの105分間にプリンを捜し出すこと。そのことの意味合いや是非が分からないまま、マイケルがカネにつられて行動したのは如何なものだが、本作ラストでは、ニューヨーク市警に包囲された車両の中でプリンの特定は完了することになる。しかし今、そのプリンを明らかにすれば、プリンは巨悪が実行した2人の市職員殺人事件の目撃者として抹殺されることになる。したがって“巨悪”の手先がいくら命じても、6人の“プリン候補者”が容易に名乗り出なかったのは当然。そして、次にそこで私が見たのは、あの『スパルタカス』と同じく、6人が次々と「I am Prynne」と名乗り出るシーン。これは、105分の間に見たマイケルの英雄的行動の中で、“6人のプリン候補者”はそれぞれマイケルによって命を助けられたことを再確認のうえ、今やプリンを守り抜くことが自分たちの使命だということを再確認したためだ。たとえ、そのために自分の命が奪われることになっても、あくまでプリンの命を守り抜く。そう決心した時、はじめて『スパルタカス』と同じように、6人のプリン候補者が「I am Prynne」と叫んで立ち上がることができたわけだ。これによって、巨悪の手先が混乱したのは当然。そして、そうなれば、マイケルはそのスキを突いて、適切な行動を起こさなくっちゃ。

『スパルタカス』を彷彿させる、こんな感動的シーンをしっかりと確認し、その後の展開についても、あなた自身の目でしっかりと！

2018(平成30)年4月18日記